

(様式 3-1)

平成 29 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 10 日

代表者 星野 祐子

研究課題名	デジタル新聞を活用した系統的学習プログラムの開発—学生の表出活動をデータにして—
研究期間	平成 28 年 6 月 1 日 ~ 平成 31 年 2 月 28 日
共同研究者	松永 修一 ・ 石野 榮一

1. 今年度の研究概要

■「日本語表現Ⅰ」での朝日新聞デジタルの実践

活動	形態	目的
① 新聞記事の要約活動	個人	個人の表現力伸長
② 新聞記事に対する意見提示	個人	語彙力の伸長
③ 要約文についての相互評価	ピア or グループ	互恵的学修
④ 要約文の紹介・発表	一対多	公的な話し方の意識
⑤ 新聞記事を活用した話し合い	グループ	個人の役割を意識した参与の意識

■「日本語表現Ⅰ」での活動に対する分析・評価

- ① 複数回の要約活動と添削により、要約スキル・要約の型の修得がみられた。型を修得することで、要約活動にかかる時間が短縮された。
- ② 語彙力の不足が文末に用いる表現の単調さにつながっている。単調であることを意識することで、自身の表現を見つめ直し、推敲することを意識するようになった。ただし、基本的な語彙力が備わっていないと推敲もうまくいかない。
- ③ 相互評価により表現の幅を広げることができた。当初は「良い点」を指摘するにとどまっていたが、活動を重ねることで、表現の不自然さの指摘、よりよい表現の提案ができるようになった。
- ④ 一対多の活動は受講人数の関係で十分行えなかったが、原稿を読み上げるのではなく、聞き手を意識する話し方を各自意識した。
- ⑤ 毎回の授業で話し合いを取り入れた。話し合いに苦手意識を持つ学生もみられるが、徐々に抵抗感なく話し合いに参加できるようになった。

■「日本語表現Ⅲ」での実践

キャリア活動を目前にした 3 年生を対象に、就職活動を意識した学びを展開した。カリキュラムの開発にあたっては、総合的な表現スキルを身に付けるべく、複数の活動を取り入れた。

■日本語表現の指導スキル向上を意識した学習会の開催

主体的な学びを引き出すために勉強会を企画した。教職員 15 名の参加があった。

タイトル：「18 歳からの「大人の学び」基礎講座を用いたインストラクショナルデザイン入門

日時：2 月 27 日（火） 14:30～17:00

講師：向後千春先生（早稲田大学人間科学学術院 教授）

2. 研究の成果

■「日本語表現Ⅰ」での表現活動を対象にした研究

「朝日新聞デジタル」を活用した学習は平成 29 年度で 3 年目となる。学生が書いた作文データや意見文データが増え、学生共通にみられる問題点が見えてきた。長い一文、不適切な引用、語彙力の不足、などである。

また 1 期生が 3 年生となり「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」「日本語表現Ⅲ」と学びを重ねていく中で、系統的なカリキュラムによる日本語スキルの向上を確認できるようになった。

■「日本語表現Ⅲ」のカリキュラム開発

1 期生を対象にした初めての実践である。当初は 2 クラス体制（1 クラス 20 名）を予定していたが、学習の効率を考え、教員 2 名で 1 クラス 40 名の学生を同時に指導した。担当教員で打ち合わせを重ね、キャリア活動に役立つカリキュラムを考案した。概要は以下である。

活動形態：

課題（個人）→ペアワーク・グループワーク→ふり返り（個人）→推敲（個人）

カリキュラム（数字は授業回数）

①オリエンテーション、②学びのデザイン・他者から見た私、③私のこだわり・生活信条、④感銘を受けた〇〇、⑤長所と短所は表裏、⑥わたしを動物にたとえると・最近気になるニュース、⑦課題解決型 GW「情報を集めて地図を完成させよう」、⑧・⑨いま、旬であると思う作家、漫画家、著名人への原稿依頼の手紙を書く、⑩仕事をするとはい（講演会）、⑪わたしの本棚、⑫ゼミでの学び、⑬多様性について考える（講演会）、⑭就職活動に役立つディスカッション対策、⑮まとめ

3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

■公表済み

年度末に本経費を活用して「日本語表現Ⅲ」の実践記録を作成した。250 部の作成で、学内・学外関係者に配布予定である。カリキュラムの目的、各回の実践概要、学生の作文を掲載した。

共立女子大学のオリジナルテキスト『表現技法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（2018 年度版）の執筆に、本研究の成果を一部活用した。

■公表予定

本学の紀要や研究会などで、実践記録として公開の予定である。